

県立図書館だより

平成29年10月

青森県立図書館報 第29号

10月27日に青森県学校図書館 シンポジウムを開催します

平成27年の学校図書館法改正をはじめ、学校図書館を取り巻く情勢は全国的に進歩しているにもかかわらず、本県においては停滞状態となっています。

本シンポジウムは、学校図書館運営に直接携わる学校職員だけではなく、整備等の施策を担う教育行政職員、技術的支援を行いうる公共図書館職員等、**学校図書館を取り巻くすべての関係者の現状認識と危機意識の共有と醸成を図る第一歩**にしたいと考えておりますので、御興味のある方はぜひ御参加ください。

- 1 テーマ 「学校図書館未進化県 あおもり発
あおもりの学校図書館をみんなで考えるシンポジウム
Note1 進化のために知ることから始めよう」

2 期 日 平成29年10月27日（金）

3 会 場 青森県総合社会教育センター
大研修室

4 対 象 学校関係者、教育行政関係者、
公共図書館関係者、一般県民 等

5 参加料 無料

次ページで詳しい内容と申込方法を御紹介します。



目 次

10月27日に青森県学校図書館シンポジウムを開催します……………	1～2
こんなレファレンスがありました……………	3～4
こどものひろば……………	5
ようこそ文学館へ！……………	6～7
カウンターからひとこと……………	8

※「ご存じですか？この資料」は休載させていただきます。

青森県学校図書館シンポジウム内容		
13:00～13:10	開会行事	
13:10～13:50	発表 1 「本県の学校図書館の現状を知る」	青森県立図書館 主任司書 妻神 昭子
13:50～14:20	発表 2 「学校図書館施策の推進」	文部科学省初等中等教育局 児童生徒課 指導調査係 係長 井川 恭輔
14:20～14:30	休憩	
14:30～15:00	発表 3－① 「本県のリーダー的動きを知る① 子どもと本をつなぐ学校図書館に 八戸市における様々な取組」	八戸市立白銀南中学校 教頭 佐々木 宏恵 (前八戸市教育委員会教育指導課 主任指導主事)
15:00～15:30	発表 3－② 「本県のリーダー的動きを知る② 知恵とマンパワーによる学校図書館 支援」	五所川原市立図書館 次長 須藤 紀子
15:30～16:20	パネルトーク 「あおもりの学校図書館が進化する には」	パネリスト 青森県立図書館 主任司書 妻神 昭子 八戸市立白銀南中学校 教頭 佐々木 宏恵 五所川原市立図書館 次長 須藤 紀子 つがる市立柏小学校 教諭 若松 由花 助言者 文部科学省初等中等教育局 児童生徒課 指導調査係 係長 井川 恭輔 コーディネーター 青森県立図書館 館長 佐藤 幸
12:30～16:20	青森県立図書館所蔵の学校図書館関連本の展示及び貸出	

- 申込方法 当館ホームページから「参加申込書」をダウンロードし、必要事項を御記入の上、次の申込先まで、郵送、FAXまたはメールでお申込みください。

<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/viewer/info.html?id=126>

- 申 込 先 〒030-0184 青森県青森市荒川藤戸 1 1 9－7

青森県立図書館 企画支援課

電話 017-739-1456 F A X 017-739-8353

メール kyo@plib.pref.aomori.lg.jp

- 申込締切 平成 29 年 10 月 18 日 (水)

～ こんなレファレンスがありました ～

【第26回】

故郷(ふるさと)の話題読み語り

「“たらふくまんま”の“たらふく”の“たら”を、考える」



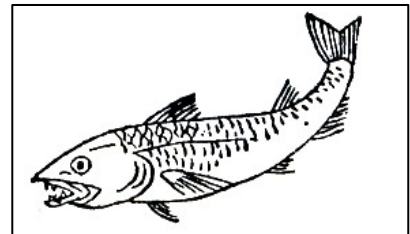
今年(2017年)は、三戸町出身の漫画家・絵本作家「馬場のぼる」さんの、生誕90年の年にあたります。馬場さんの作品は沢山ありますが、その中に『たらふくまんま』という悪さばかりする大食らいの山男の話があります。とても楽しい絵本です。是非、一度ご覧ください。

この『たらふくまんま』とは、「鰯腹(たらふく)ご飯(を食う)」ということですが、今日はこの「鰯腹」の「鰯」についてのご質問からです。

【質 問】

「鰯」という漢字があるけど、「タラ」には、他の漢字があったように思う。
どんな字だったか知りたい。

このような質問を受けたとき、新人の職員は国語辞典か漢和辞典を出して……。と、元気よく書架の8類「言語」の棚に向かいます。勿論、ベテラン職員も同じことをするのですが、頭の中では……“態々、図書館まで足を運んで、「タラ」の漢字だけで終わろうはずはない。次なる質問があるに違いない。”と、魚類図鑑、水産・加工、流通、料理……。と、考えを巡らせます。



『和漢三才図絵』より
鰯 の 絵

『日本国語大辞典 第二版 8』（小学館 2001）を開いて「たら【鰯・大口魚】」の記述を確認し、利用者の方にお見せすると、「いやあ～、これじゃないな。違うな。」と、次なる質問の前にハードルが現れました。考えていた事柄と違っていましたが、このとき既に、辞典の記述をチラ見して「キーワード」となるものに目星をつけています。

「たらは唐土の書に見へず。鰯は俗字なるとて用ひず。」という記述がヒントです。

漢字は中国から渡来し、日本に根付いた文字ですが、「国字」といって、日本で作られた漢字も沢山あることを、ご存知の方もいらっしゃると思います。

青森県の地名・苗字にある「菰(やち)」や「蓑(ほろ)」も「国字」です。

そこで、『国字の位相と展開』（笹原宏之/著 三省堂 2007）p. 359を見ると、古くは「多楽」という字を当てたものがあつた。中国では「たら」を指すという漢字が「鰻」をはじめ7字ほどある。といった紹介がされています。

利用者の方の探していた漢字があつたようで、早速、メモを取られていました。

因みに、図書館員が漢字を調べるときに絶大なる信頼をよせる「諸橋(諸橋徹次先生編集、大修館の『大漢和辞典』)」は、こんな時には後回しにします。

諸橋先生の辞典は、中国の古典からの出典が多いことでは、大変、助かるのですが、国字では、解説が僅か数行ということがあります。(図書館員の方が「そう、そう」と言いながら、大きく頷いている、或いはニヤリとしている姿が見えそうです。)

利用者の方がメモを取るのに合わせ、間を置いていると、次の質問が……、

【質 問】

「菊」は、昔も食べていたのだろうか？

食べていたとしたら、どんな食べ方だったのだろうか。

「菊(子)」というのは、鱮の白子のことです。

津軽では「たつ」「たづ」とも言いますが、『日本国語大辞典 第二版 8』では、「たらの菊(きく)」は、青森県上北郡の方言として、また、「たち」(方言)の項では、白子の意で、形の類似する同語源として新潟県岩船郡の言葉「たつ」が紹介されています。

さて、初めに紹介した『国字の位相と展開』では、「鱮」は、室町時代既に「たら」の字として使われていたそうですので、食用として、相当古くから一般的な食材だったと思います。ですが、室町時代まで遡るのは、流石に直ぐにはいきません。

そこで、こんな時には強い味方『和漢三才図絵』。

この本は、江戸時代中期、正徳2(1712)年、医師寺島良安によって、編纂された百科事典です。(東洋文庫 1987 年版 第7巻；全 18 巻を使用)最初に載せた絵とともに、「その鰯(わた)は煮て食べるとよく、或いは醋(す)に浸して食べてもまた佳い。菊鰯・雲鰯があるが、それは形色から名づけたもので、大へんこれを賞味する。」と書かれています。また、塩鱮、乾燥鱮のことまで書いてあります。室町とまではいきませんが、300 年前には、今と変わらない加工、食べ方をしていたのですね。

ここで先ほどの絵、どうやら鱮の絵としては、問題がありそうだと思う記述に気が付きました。「頷(あご)の下に細い鬚(ひげ)があるが見えにくい。」と書かれています。絵の中に描かれていれば疑問もなかったのですが、書かれていません。

【質 問】

もう少し鱮のこと詳しく書いた本がありませんか、それと・・・、
「タラ汁と雪道は後がよい」という諺の意味・語源を確認したいのですが。

『魚紳士録』(木村重/著 緑書房 1983)は、昔の官家では鱮を「ユキ」と呼んでいたといった話から、古代の化石、分類、生体、食まで詳細な解説があり、お勧めの本です。

確認してみると、マダラが代表格のタラ亜科の魚は、背びれが三基、しりびれが二基、そして下あごに1本のひげを持つとなっていますから、右のイラストが正しい姿です。



「タラ汁と雪道は後がよい」という諺については、利用者の方が以前何かで“イキの良いものより、やや鮮度の落ちたものに風味がある。”ということだと読んだけど、長く疑問に思っているとのこと。

『おもしろいサカナの雑学事典』(篠崎晃雄ほか/著 新人物往来社 1994)は、魚介類ごとに1～2, 3ページにまとめられ、必要な情報はしっかりと、また、諺や漢字、海にでる化け物の話など満載の、読み物としても楽しめる事典です。さて、この事典によると、タラは時間をかけて煮た方が、味がしみて旨い。雪道も、人が歩いたあとを歩くのが歩きやすい。と解説しています。また、料理研究家千葉彩子先生も『月刊れちおん青森』(昭和54年12月号 青森地域社会研究所)の「ジャッパ汁考」で、同様に仰っています。

利用者の方も「そうだね。」と長年の疑問を解消されたようです。

以上で、レファレンスは終了しました。

最後に、タイトルの中の「たらふく」、漢字の「鱮腹」は当て字・俗言です。

『魚紳士録』『おもしろいサカナの雑学事典』では、鱮は、貝類や蟹・ヒトデなど何でも手当たりしだいの暴食で、この当て字になったのだろうということ、そしてなんと、胃潰瘍を起こす(『魚紳士録』では、北海道大学の野田先生の研究)と書かれています。

『たらふくまんま』の山男は、大食いですが暴食ではありません。鱮のような胃潰瘍の心配はなさそうです。これからも元気に、絵本の主人公として、子どもたちに笑いを届けとっちばれ。

● レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757
電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

こどものひろば



11 ぴきのねこは 50 才(ニャゴニャゴ)！馬場のぼるさん生誕 90 年

今年(2017 年)は、『11 ぴきのねこ』が出版されて、ちょうど 50 年になります。とらねこ大将やねこたちも、なんと 50 才ですって。児童閲覧室では、9 月 29 日から 10 月 25 日まで「11 ぴきのねこは 50 才 おたんじょうびおめでとう！」というテーマで展示をしています。作者の馬場のぼるさんは、昭和 2 (1927) 年三戸町生まれですから、馬場さんの生誕(生まれた年から)90 年の記念の年でもあります。

『11 ぴきのねこ』がこぐま社から出版されたのは昭和 42 (1967) 年。

“子供たちが読む本は、教育的なものでなければならない”と、悪書追放運動が起こり、手塚治虫さんの作品でさえ、ロボットが空を飛ぶなんて子どもたちに嘘を教えている！と、母親たちから排除されたのは昭和 30 年代半ばのことです。

とらねこ大将たちが生まれたのもまだまだそのような時代でした。馬場さんは「たまには子ども達がびっくり仰天するような、何のためにもならない、子供たちの意表をつくものをぶっつけてやろう」と『11 ぴきのねこ』を描いたそうです。

時代の潮流とは真逆の、とらねこ大将率いるねこたちがどうなったかは、皆さんご存知のとおりです。翌昭和 43 (1968) 年には、産経児童出版文化賞を受賞。翌々年の昭和 44 (1969) 年には、井上ひさしさんの脚本で人形劇になるなど、ねこたちは快進撃(ニャゴニャゴ!)！その後 29 年間で生まれた 6 作品は、子どもたちが大好きな絵本として、世代を越えて愛され続けています。

「絵本を作るのに、あんまり子供のためにとか、考えてないですね。まずは、自分が面白いと思うかどうか。その面白いことを、さて、どうやって子どもたちにわかってもらおうかと考える」と語っていた馬場さん。ご自身の面白いという気持ちが 11 ぴきのねこ達にあふれているから、子どもたちの心をとらえて離さないのでしょうか。(ちなみに、馬場さんが一番大事にしていること、それは、「どの場面にもちゃーんと 11 ぴきいるかどうか」なんだとか…。)



「11 ぴきのねこは 50 才 おたんじょうびおめでとう
～馬場のぼる生誕 90 年～」見に来てくださいね！

馬場さんの展示と一緒に、翻訳家であり児童文学者でもあった、「白木茂」さんの本も展示しています。同じ三戸町出身の白木さんは馬場さんの才能を認め、世に出るきっかけを作ってくれた人です。2 人の共作『てんぐのめんの宇宙人』は、2 人のふるさと、三戸の風景が描かれているそうですよ。

ところで、馬場さんの絵本にでてくる食べものって、どうしてあんなにおいしそうなんでしょう。『11 ぴきのねことあほうどり』の、「コロッケ」や「とりのまるやき(食べられませんでしたけどね!)」、『きつね森の山男』の、ほっかほかの「ふろふき大根」、『おおかみがんばれ』の「せかいいちうまいじゃがいもスープ」…。どれもおいしそうで、お腹がくうくう鳴りそうです。

近代文学館資料の紹介(第28回)

「没後 80 年・菊谷栄展」展示資料から

青森県近代文学館では、平成 29(2017)年 10 月 28 日から平成 30 年 1 月 14 日まで、「没後 80 年・菊谷栄展」を開催します。

青森市出身の菊谷栄（きくや・さかえ）は、「エノケン」の愛称で知られる榎本健一の座付き劇作家として、昭和初期の黄金時代を支えた人物でした。

今回は、展示資料の中から 4 点を紹介します。

①菊谷栄遺品絵画

菊谷栄(本名・栄蔵)は、明治 35(1902)年青森県東津軽郡油川村(現青森市)に生まれました。大正 10(1921)年に上京し、演劇の舞台美術を学ぼうと日本大学法文学部美学科(現芸術学部)に入学、有名な川端画学校にも通って、画家になることを夢見ていました。今回の展示では、菊谷栄が遺した数多くの絵画を展示します。



菊谷栄自画像(1923 年 1 月)

②プペダンサント第五十回公演パンフレット

昭和 5(1930)年、画家としてなかなか芽の出なかった菊谷に転機が訪れます。後に日本の喜劇王と呼ばれる「エノケン」こと榎本健一と出会い、榎本の立ち上げた劇団「新カジノ・フォーリー」に舞台装置製作で参加、榎本が浅草の劇団「プペダンサント」に移ると、菊谷も行動をとともにしました。

当時、プペダンサントの文芸部長はサトウハチロー、部員には後に「君の名は」で一世を風靡する菊田一夫がいました。

写真は「プペダンサント第五十回公演パンフレット」(昭和 6 年 8 月 21 日発行)です。最終ページに「舞台装置 菊谷栄」の名を見ることができます。



③ 菊谷栄遺品 舞台装置下絵、写真

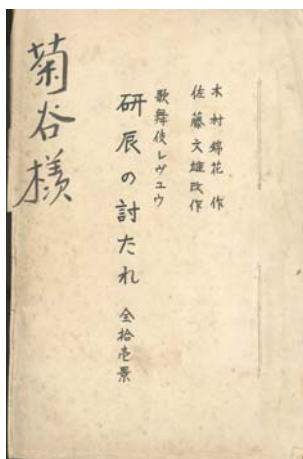


菊谷が遺した絵の中には、舞台装置の下絵と見られる緻密に書き込まれた小品が多くあります。そのうち左上の絵の左側には「ヴァラエテー／ビツクリハウス」と記されていますが、これをもとに実際の舞台装置が製作されたことが右上の写真によって分かります。この写真は菊谷の遺品中にあったもので、裏には菊谷の筆跡で「1931. 5 ヴアラエテー「ビツクリ・ハウス」」と記されています。

④ 菊谷栄遺品 台本

舞台装置担当としてエノケンに誘われた菊谷でしたが、ひょんなことから脚本を書くことになり、みるみるうちに座付き作家としての地位を獲得、「リオ・リタ」「巴里の与太者」「民謡六大学」などのヒット作でエノケンの黄金時代を支えることになります。

下の写真は、菊谷が歌舞伎演目を脚色した（佐藤文雄は菊谷の変名）「歌舞伎レヴュウ 研辰（とぎたつ）の討たれ」台本です。表紙には「菊谷様」と墨書きされ、菊谷自身が使っていたものであることが分かります。



それにしても、画家志望だった菊谷栄がどうして劇作家になることができたのでしょうか。実は、舞台美術を学ぶために入学した日大時代、菊谷は、古今東西の戯曲を読み込むとともに、歌舞伎、新劇の生の舞台を精力的に見て歩いては日記のように劇評を書き、多くのオリジナル戯曲を試作していたのです。残された菊谷の劇評、戯曲原稿の数々を見たとき、このような素地があったからこそ、伝説となる優れた作品を次々と生み出すことができたのだと

理解されます。今回、この劇評、戯曲も展示します。

残念ながら菊谷は、活躍の真っ只中、昭和12(1937)年9月に兵役召集を受け、11月9日、中国で戦死してしまいます。

本展では、画家を志して上京しながらも、劇作家として大衆と向き合う道を選び、志半ばで戦火に散った**菊谷栄の生涯と業績を、竹内俊吉、太宰治といった県ゆかりの文人たちとの交流のエピソードをまじえ、時代・文化的背景とともに紹介**します。是非ご覧いただけたらと思います。

カウンターからひとこと(第27回)



今回は、“**大活字本・デージー図書**”についてお知らせします。

大活字本とは

視力が弱い方、小さな文字が読みづらい方にも読みやすいように、一般的な本よりも行間が広く、字が大きく印刷されている本です。字が大きく印刷されているため、分冊(一つの本を何冊かに分けること)されていることが多いのが特徴です。

大活字本は一般閲覧室の4番カウンター前の棚(A11A、B11A、C11A)に置いています。



大活字本とデージー図書の棚【A11A】

デージー図書とは

「デージー」とは **Digital Accessible Information System** の略称で、本を録音したデジタル資料です。利用には専用の機械が必要ですが、一般的な本と同じように見出しから探して読みたい部分を読んだり、読み飛ばしたりすることができます。こちらは大活字本と同じ棚(A11A)に置いています。



デージー図書とデージー再生機

館外への貸出について

大活字本・デージー図書ともに**館外への貸出が可能**です。

館内でデージー図書を利用する際は**専用の再生機器**をお使いいただけます。館外貸出したデージー図書は、ご自宅のパソコンに**専用の再生ソフト**をインストールすることで利用できます。インターネットの検索エンジンで「デージー図書 再生ソフト 無料」と検索すると、LpPlayer (エルピープレイヤー)、AMIS (アミ) というソフトがヒットするので、ダウンロードしてご利用ください。